

研究報告

3 カ月児をもつ父親の育児行動と育児に関する学習 および態度との関連

高瀬 佳苗¹, 河口 てる子²

The Relation among Father's Childcare Behavior toward a Three-month-old Baby, Father's Learning and Acquiring, and Attitude toward Childcare.

TAKASE Kanae , KAWAGUCHI Teruko

キーワード：父親の育児行動、父親の育児に関する学習と態度、生後3カ月の児

Key Words : Father's Childcare Behavior, Father's Learning, Father's Attitude, Three-month-old Baby.

Abstract

The purpose of this study was to determine the relation among father's childcare behavior toward a three-month-old baby, father's learning and acquiring, and attitude toward childcare. The questionnaire that authors developed from the precedent articles was used in a sample of 151 fathers who had a three-month-old baby, and the following result became clear.

1. The degree of father's childcare behavior decreased when the number of children increased ($\rho = -.291 \sim \rho = -.320$). However, there were six factors which were not significant: what job they have, what educational background they have, what job their wife have, if they live together with their parent, what time they come home, and if they have holidays.

2. There was weak correlation ($\tau = .202 \sim \tau = .303$) between father's learning and attitude toward childcare.

3. The strong correlation ($\tau = .201 \sim \tau = .489$) was observed between father's childcare behavior and attitude toward childcare.

4. There was weak correlation ($\tau = .211 \sim \tau = .370$) between father's learning and father's childcare behavior.

5. Subjects learned their house work behavior from their father, and did the similar house works. Also, it was assumed that the degree of experience in doing something together with their father affected their affection toward the children.

These findings suggest that there are interactive relations between father's learning and attitude to childcare and affect father's childcare behavior toward a three-month-old baby.

¹ 日本赤十字看護大学大学院 ² 日本赤十字看護大学教授

受付日：2004年8月16日

採用日：2004年12月8日

要旨

この研究の目的は、3カ月児をもつ父親の育児行動と育児に関する学習および態度との関連を明らかにすることである。

先行研究を参考に研究者が作成した質問紙を用いて3カ月児をもつ父親151人に調査を行い、以下の結果が明らかになった。

1. 子どもの数が増えると対象者の育児行動は少なくなる ($\rho = -.291 \sim \rho = -.320$)。しかし、対象者の職業や最終学歴、妻の職業の有無や祖父母との同居の有無、対象者の帰宅時間や休日の有無による差はみられなかった。

2. 育児に関する学習は、育児に関連した態度と弱い関係があった ($\tau = .202 \sim \tau = .303$)。

3. 育児に関連した態度と対象者の育児行動には、やや強い関係がみられた ($\tau = .201 \sim \tau = .489$)。

4. 育児に関する学習と対象者の育児行動は、弱い関係があった ($\tau = .211 \sim \tau = .370$)。

5. 対象者は、実父がしていた家事行動を学習し、同じような家事行動をしていた。また、実父との直接経験が対象者の子ども好きの感情に影響を与えると推測された。

本研究より、育児に関する学習と育児に関連した態度は相互に関係があり、かつ、対象者の育児行動と関係すると考えられる。

I. 研究の背景

日本では少子化が進んでおり、1人の女子が一生の間に生む子どもの数は年々減少している(厚生統計協会, 2002)。その背景の1つには、子どもを育てる際の精神的、身体的負担があげられている(厚生白書, 2002)。これは、子育てが24時間休みなく続き、一時もその手を休めることができないものであり、育児を担っている人の負担が大きいことによるだろう。

その育児についてみると、子どもが生まれて3カ月頃は育児負担が大きい時期の1つである。この時期の子どもの首の座りは不完全で、その扱いには慎重が必要である。また、夜中の授乳が残っており授乳する人の身体的な負担となる。そして、子どもと親の生活活動の範囲は家庭の外に広がるが、それには特別な準備を整えなければならない。つまり、生後3カ月という発達段階では、育児のための時間、手間、そして労力は、生後1か月の頃のそれと大差がないのが現実であろう。

そのような育児の負担が大きい時期において、父親には中心的に育児を担っている母親の支援者となる役割が期待されている(柏木, 1994; 厚生統計協会, 2002)。具体的には、父親が母親に代わって、子どもにミルクを与えたりおむつ交換を

する、また掃除や家事を補助することなどがあげられ、これらは直接的、間接的に母親の育児負担を軽減するといっても過言ではないだろう。それでは、実際に3カ月児をもつ父親はどのような育児行動を行っており、その育児行動にはどのようなことが関係しているのだろうか。

これまでの父親の育児に関する研究を見ると、父親と子どもとの遊びの内容や父親不在の影響などが明らかにされている。父親と子どもの遊びでは、父親は子どもとの身体的遊びが多いことがあげられる。また、父親不在の影響では、実質的な父親不在が母親に精神的、経済的な過剰負担の状況を作るとされる(柏木, 1994)。このように、父親の育児に関する研究は、子どもや母親に対して父親が果たす役割という視点で研究されており、父親の育児行動に焦点をあてた研究は非常に少ない。そのため、父親が行っている育児行動の内容や、その行動にはどのようなことが関係しているのかは明らかにされていない。

以上のことから、父親の育児行動を明らかにし、かつ、それに関わる要因について検討する必要がある。これによって、看護職が父親に対してどのような視点から育児に関する看護を提供すれば良いのか、その示唆が得られるであろう。

Ⅱ．文献検討

一般に、父親や母親の育児行動は生得的な行動ではなくて、家庭や社会生活の中での学習によって得るものであるとされている（辰野，1973；小野寺，1990）。また、父親や母親を育児行動に向かわせる顕在的な行動傾性、すなわち、態度があり、この態度は学習の影響を受けて育児行動に影響を与えるという（岡部，1985；柏木，1994）。つまり、育児に関する学習、育児に関連する態度、そして育児行動は相互に関係があるといえるであろう。

この育児に関する学習としては、自分の親や身近な人の子育ての様子を見たり聞いたりすること、子育てに関する情報を知識として得ること、そして直接育児の経験をするなどがある（辰野，1973）。一方、育児に関する態度では、子どもが可愛いあるいは可愛くないという感情、妻を愛しているまたは愛していないなどの気持ち、そして育児は共同で行うものといった育児の役割意識などの顕在的な傾向があげられている（柏木，1994）。

これまでの父親の育児行動に関する研究では、父親の子どもへの感情、妻への気持ち、子どもをもつ前の育児経験などについて検討が行われている。その1つとして、子どもへの感情に関する研究では、父親の子どもや子どもの世話に対する肯定的な感情は、父親が育児行動をする動機になっていると述べている（藤川・千葉・我部山，1994）。だが、藤川・千葉・我部山（1994）の調査は、母親からみた父親の感情とその育児行動について明らかにしたもので、父親がその調査の対象者となり父親の育児行動を明らかにしたものではない。また、父親の育児に関する学習についての研究では、育児の学習経験は子どもに関わる意識に関係しているという（秋山・板倉・江口他，1997）。しかし、秋山・板倉・江口他（1997）は、子どもに関わる意識と父親の育児行動との関係について言及してはいない。そして、妻への気持ちに関する調査では、子どもの世話をする妻を見て夫は「妻が大変だな」（p.256-267）と妻に対するいたわりの気持ちをもっていると報告している（高橋・高野・小宮山他，1990）。だが、この調査では妻への気持ちと父親の育児行動との関係につい

での検討が不足しており、それらの関係は明らかにされていない。

以上のように、父親の育児行動に関する研究では、父親自身が研究対象者とされる研究報告は極めて少なく、父親の育児行動にどのような要因が関わっているかは未だ明らかにされはしない。すなわち、育児に関する学習、育児に関連した態度、そして育児行動との相互の関係は十分に検討されているとはいえない。

したがって、看護職が父親の育児行動を支援するためには、父親の育児行動にはどのような育児に関する学習や育児に関連した態度が関わっているのかを明らかにし、かつ、これらが父親の育児行動とどのように関わっているか、それぞれ相互の関係を検討する必要がある。

Ⅲ．研究目的

本研究の目的は、育児に関する学習、育児に関連した態度、そして父親の育児行動との相互の関係を明らかにすることである。

また、この研究では、育児に関する学習、育児に関連した態度、そして父親の育児行動の用語について、以下のように操作的に定義して用いる。

父親の育児に関する学習とは、実父の子育て、直接経験、育児情報、両親学級での育児に関する学習のことである。

①実父の子育ては、自分の父親がしていた育児に関する行動の観察による学習とする。

②直接経験は、父親が赤ちゃん・年少の子どもの世話を直接経験することである。

③育児情報は、マス・メディア、雑誌等から赤ちゃんの世話や育児について情報を得ることである。

④両親学級は、出産準備教室として行われるプログラム化された健康教育をさす。

父親の育児に関連した態度とは、育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情である。

①育児の共同化意識は、子育ての役割がどちらか一方に偏るのではなく、子育てを共同で行うという意識のこと。

②妻への配慮は、妻の育児負担に言葉や態度で示す感謝の気持ちや行動で、妻を愛している又は

嫌いという感情も含める。

③子ども好きは、父親の子どもをもつ前からの子ども好き・嫌いという気持のこと。

④子どもへの感情は、自分の子どもへの肯定的および否定的な両方の感情のことである。

父親の育児行動とは、子どもに関連した哺乳・オムツ交換・沐浴等の家事を含む育児行動のことである。

Ⅳ. 作業仮説

この研究の作業仮説は、以下のとおりである。

①育児に関する学習（実父の子育て、直接経験、育児情報、両親学級）と父親の育児行動との間には弱い正の相関があり、育児に関する学習をする人ほど育児行動を行う。

②育児に関連した態度（育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情）と父親の育児行動との間には比較的強い正の相関があり、育児に関して肯定的な態度の人ほど育児行動をする。

③育児に関する学習（実父の子育て、直接経験、育児情報、両親学級）と育児に関連した態度（育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情）には弱い正の相関があり、育児に関する学習をする人ほど育児に関連した態度は肯定的である。

Ⅴ. 研究方法

研究方法是、質問紙を用いた調査研究であった。A県B町において平成11年1月から6月に出生した子どもをもつ父親196人を対象に、平成11年5月から10月の期間に調査を行った。具体的な調査方法は、3カ月児健康診査の開催通知に調査依頼文と質問紙を同封して郵送し、3カ月児健康診査の会場で回答した質問紙を回収した。健康診査の会場には回収箱を設置し、3カ月児健康診査票とは別々に回答した質問紙をその箱に回収した。また、この調査の倫理的配慮は、質問紙の記入が無記名で行われ、個人が特定されることがない旨を調査依頼文と質問紙表紙の文面で説明し、調査への同意を得た。

質問項目の作成では、藤原・黒川・秋月（1983）、

高橋・高野・小宮山他（1989）、藤田（1993）、藤原・日隈・吉田（1994）などを鑑みたが、最終的には独自の90項目を作成した。そして、この質問紙は実父の子育て、直接経験、育児情報、両親学級、育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情、対象者の育児行動、の9要素から構成された。また、質問紙の作成段階では、その内容の妥当性を確保するため、指導教官と地域看護学教員2人の助言を得た。

A. 調査内容

調査内容は、①属性、②調査対象者の実父の子育て17項目、③直接経験7項目、④育児情報7項目、⑤両親学級に関する項目4項目、⑥育児の共同化意識9項目、⑦妻への配慮10項目、⑧子ども好き8項目、⑨子どもへの感情10項目、⑩対象者の育児行動18項目、である。なお、両親学級に関する項目以外は、「全くしない」、「たまにする」、「時々する」、「よくする」、「いつもする」などとする回答選択肢に、それぞれ順に1から5の数字をふった5段階の順序尺度である。

B. 分析方法

育児に関する学習（実父の子育て、直接経験、育児情報、両親学級）、育児に関連した態度（育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情）、そして父親の育児行動との相互の相関関係は、ケンドールの順位相関係数を使用した。また、子どもの数と父親の育児行動、育児に関する学習、そして育児に関連した態度のそれぞれ項目の相関は、スピアマンの順位相関係数を用いて検討した。属性の回答の差はカイ二乗検定を行い、数の少ないものはMann-Whitney検定およびKruskal-Wallis検定を行った。また、有意水準は5%を採用した。

Ⅵ. 調査結果

A. 対象者の特性

有効回答は151人で、有効回収率は77.0%であった。対象者の平均年齢は31.3歳（SD ± 6.05）、妻の平均年齢は29.2歳（SD ± 4.60）、調査実施時の結婚年数は平均4.36（SD ± 3.27）年、子供の数は平均1.63（SD ± 0.74）人であった。また、対象

者の職業では常勤が124人（82.1%）と最も多く、次いで自営業等は20人（13.2%）と回答した。妻の職業で最も多いのは無職128人（84.8%）で、常勤が12人（7.9%）であった。同居者としては、実父33人（21.9%）、実母35人（23.2%）、義父11人（7.3%）、義母11人（7.3%）をあげた。そして、帰宅時間が決まっている対象者は74人（49.0%）で、休日が決まっている対象者は108人（71.5%）であった。

B. 対象者の育児行動

対象者の育児行動とは、児に関連した哺乳・オムツ交換・沐浴等の家事を含む育児行動のことである。

この調査における、3カ月児をもつ対象者（父親）の育児行動は表1のとおりであった（表1）。また、子どもの数が多くなると対象者の育児行動は少なくなったが（ $\rho = -.291 \sim \rho = -.320, p < .05$ ）、外出時の付き添いと買い物では、子どもの数が1人と3人の対象者は、有意に多く外出時の付き添いと買い物をしていた（Kruskal-Wallis検定, $p < .05$ ）。

C. 育児に関する学習と育児行動

育児に関する学習とは、実父の子育て、直接経験、育児情報、両親学級での育児に関する学習のことである。調査の結果、実父の子育て、直接経験、育児情報の項目と対象者の育児行動の項目には弱い正の相関がみられたが、両親学級の項目と

育児行動の項目には有意な相関がなかった。

1. 実父の子育てと対象者の育児行動

実父の子育てとは、自分の父親がしていた育児に関する行動の観察による学習である。

実父の子育ての項目と対象者の育児行動の項目には弱い正の相関があり、「実父が育児をしていた」人ほど、対象者は買い物や掃除（ $\tau = .208, p < .05$; $\tau = .224, p < .05$ ）、洗濯をしていた（ $\tau = .263, p < .05$ ）。また、「実父の子育ての話聞いたことがある」人ほど、食事の後かたづけ（ $\tau = .208, p < .05$ ）、洗濯をすると回答した（ $\tau = .242, p < .05$ ）。

2. 直接経験と対象者の育児行動との関連

直接経験とは、父親が赤ちゃん・年少の子どもの世話を直接経験することである。

直接経験の項目は育児行動の項目と弱い正の相関がみられ、過去に「自分のきょうだいや身近な友達の児の世話をしたことがある」人ほど、子どものオムツ交換（ $\tau = .229, p < .05$ ）、掃除（ $\tau = .312, p < .05$ ）をしていた。また、「過去に家事の経験がある」人ほど、食事の後かたづけ（ $\tau = .322, p < .05$ ）、洗濯（ $\tau = .305, p < .05$ ）などの育児行動をすると回答した。

3. 育児情報と対象者の育児行動との関連

育児情報とは、マス・メディア、雑誌等から赤ちゃんの世話や育児について情報を得ることである。

育児情報と対象者の育児行動との関連をみると、「きょうだい、友達、同僚から、児の世話に

表1. 対象者の育児行動

育児行動	全くしない		たまにする		時々する		よくする		いつもする		無回答	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1) スキンシップ	2	(1.3)	12	(7.9)	28	(18.5)	54	(35.8)	54	(35.8)	1	(0.7)
2) 抱っこ	3	(2.0)	8	(5.3)	30	(19.9)	60	(39.7)	48	(31.8)	2	(1.3)
3) 遊び相手	3	(2.0)	17	(11.3)	46	(30.5)	45	(29.8)	39	(25.8)	1	(0.7)
4) 泣いた時あやす	3	(2.0)	14	(9.3)	51	(33.8)	55	(36.4)	27	(17.9)	1	(0.7)
5) 散歩	25	(16.6)	48	(31.8)	47	(31.1)	19	(12.6)	11	(7.3)	1	(0.7)
6) 日頃の世話	7	(4.6)	23	(15.2)	58	(38.4)	43	(28.5)	18	(11.9)	2	(1.3)
7) お風呂に入れる	17	(11.3)	19	(12.6)	21	(13.9)	41	(27.2)	51	(33.8)	2	(1.3)
8) オムツ交換	19	(12.6)	33	(21.9)	43	(28.5)	40	(26.5)	15	(9.9)	1	(0.7)
9) 赤ちゃんの着替え	27	(17.9)	39	(25.8)	47	(31.1)	28	(18.5)	9	(6.0)	1	(0.7)
10) ミルクをあげる	31	(20.5)	36	(23.8)	40	(26.5)	31	(20.5)	12	(7.9)	1	(0.7)
11) 外出時の付き添い	4	(2.7)	11	(7.3)	31	(20.5)	47	(31.1)	57	(37.7)	1	(0.7)
12) 夜間の対応	58	(38.4)	51	(33.8)	26	(17.2)	8	(5.3)	8	(5.3)	0	(0.0)
13) 日頃の家事	35	(23.2)	49	(32.5)	39	(25.8)	18	(11.9)	10	(6.6)	0	(0.0)
14) 買い物	13	(8.6)	41	(27.2)	41	(27.2)	44	(29.1)	12	(7.9)	0	(0.0)
15) 掃除	44	(29.1)	48	(31.8)	41	(27.2)	15	(9.9)	3	(2.0)	0	(0.0)
16) 食事の準備	48	(31.8)	48	(31.8)	36	(23.8)	16	(10.6)	3	(2.0)	0	(0.0)
17) 食事の後かたづけ	41	(27.2)	54	(35.8)	33	(21.9)	14	(9.3)	9	(6.0)	0	(0.0)
18) 洗濯	74	(49.0)	45	(29.8)	24	(15.9)	5	(3.3)	3	(2.0)	0	(0.0)

ついて話を聞いたことがある」人ほど、子どもの遊び相手や ($\tau = .221, p < .05$)、着替えをする と回答した ($\tau = .209, p < .05$)。また、「妻から母親学級の情報を伝えてもらったことがある」人ほど、子どもの遊び相手をしていた ($\tau = .211, p < .05$)。

4. 両親学級と対象者の育児行動との関連

両親学級とは、出産準備教室として行われるプログラム化された健康教育である。両親学級の参加の有無と対象者の育児行動との関連は、多くの項目間において、ほとんど相関がなかった ($\tau = .151 \sim .192, p < .05$)。

D. 育児に関連した態度と育児行動

育児に関連した態度とは、育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情である。

育児の共同化意識、妻への配慮の気持、子どもへの感情の項目と対象者の育児行動の項目にはやや強い正の相関があった。

1. 育児の共同化意識と対象者の育児行動との関連

育児の共同化意識とは、子育ての役割がどちらか一方に偏るのではなく、子育てを共同で行うという意識のことである。

育児の共同化意識の項目は、育児行動の項目とやや強い正の相関があった ($\tau = .201 \sim .489, p < .05$)。「育児は共同作業だと思う」人ほど、子どもを抱いたり ($\tau = .408, p < .05$)、子どもとスキンシップ ($\tau = .343, p < .05$) をしていた。また、「育児は夫・妻関係なく行うものだと思う」人ほど、子どもの夜間の対応をし ($\tau = .223, p < .05$)、育児を分担したい人ほど、食事の後かたづけをする と回答した ($\tau = .220, p < .05$)。しかし、「育児は妻の仕事だと思っている」人ほど、子どもの夜間の対応や食事の後かたづけをしていなかった ($\tau = -.200, p < .05; \tau = -.201, p < .05$)。

2. 妻への配慮と対象者の育児行動との関連

妻への配慮とは、妻の育児負担に言葉や態度で示す感謝の気持ちや行動で、妻を愛している又は嫌いという感情である。

育児に伴う妻へ配慮の行動や気持ちと育児行動との関連では、妻への配慮の項目と育児行動の項目には正の相関があった。「妻へ感謝の言葉をかけている」人ほど、子どもを抱いたり ($\tau = .248,$

$p < .05$)、オムツ交換 ($\tau = .246, p < .05$) をしていた。また、「妻への心配りを行動で示している」人ほど、遊び相手 ($\tau = .448, p < .05$) や日頃の世話 ($\tau = .416, p < .05$) をすると回答した。そして、「妻と子育てを一緒に考えている」人ほど、子どもの抱っこ ($\tau = .487, p < .05$) や遊び相手 ($\tau = .489, p < .05$) などの育児行動をしていた。

3. 子ども好きと育児行動

子ども好きとは、父親の子どもをもつ前からの子ども好き・嫌いという気持のことである。

子ども好きの項目と対象者の育児行動の項目には弱い相関があった。「もともと子ども好きである」人と ($\tau = .278, p < .05; \tau = .275, p < .05$)、「子どもと遊びたいほうだった」人ほど ($\tau = .301, p < .05; \tau = .255, p < .05$)、子どもの遊び相手や着替えをすると回答した。しかし、「もともと子どもが嫌だ」とした人ほど、子どもとのスキンシップや遊び相手をしていなかった ($\tau = -.244, p < .05; \tau = -.234, p < .05$)。

4. 子どもへの感情と対象者の育児行動との関連

子どもへの感情とは、自分の子どもへの可愛いという肯定的な感情と、可愛く感じられないという否定的感情の両方のことである。

子どもに対する感情の項目で「自分の子どもは可愛い」人は、子どもを抱いたり ($\tau = .245, p < .05$)、遊び相手 ($\tau = .277, p < .05$) をしていた。また、「子どもを抱っこしたりあやすのがすきな」人と、「自分の子どもの世話は楽しい」人ほど、子どもの遊び相手をする と回答した ($\tau = .455, p < .05; \tau = .422, p < .05$)。しかし、「子どもに束縛されるようでいやな」人は、子どもとのスキンシップをしないと回答し ($\tau = -.265, p < .05$)、「子どもの世話は面倒でいやだなと思う」人ほど、子どものオムツ交換をしていなかった ($\tau = -.233, p < .05$)。

E. 育児に関する学習、育児に関連した態度、そして育児行動の相互関係 (図1)

育児に関する学習の項目 (実父の子育て、直接経験、育児情報) と対象者の育児行動の項目には弱い相関がみられ ($\tau = .211 \sim \tau = .370, p < .05$)、実父の子育ての見聞きの経験や育児の直接経験があり、育児の情報を得たいと考えている人ほどオムツ交換や洗濯などをしていった。

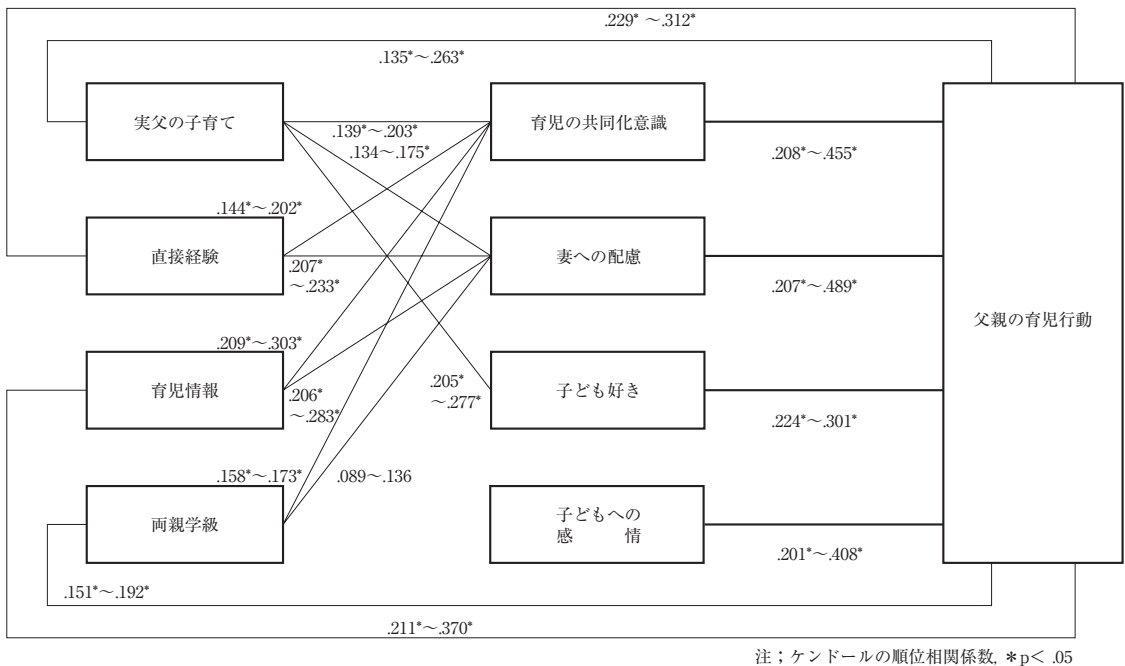


図1．育児に関する学習（実父の子育て、直接体験、育児情報、両親学級）、育児に関連した態度（育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き、子どもへの感情）、育児行動の相関

また、育児に関連した態度の項目（子ども好き、子どもへの感情）と対象者の育児行動の項目には正の相関がみられ（ $r = .203 \sim r = .455, p < .05$ ）、児に肯定的な感情がある人ほど、子どものオムツ交換や着替えなどの育児行動をしていた。

そして、育児に関する学習の項目（実父の子育て、直接経験、育児情報）と育児に関連した態度の項目（育児の共同化意識、妻への配慮）には、弱い相関があった（ $r = .202 \sim r = .283, p < .05$ ）。実父が子育てをしていた人で、過去に育児の経験があり、育児の情報をもっている人ほど、育児の共同化意識があり妻への配慮をしていた。しかし、対象者の両親学級参加の有無と育児に関連した態度（育児の共同化意識、妻への配慮）および育児行動には、ほとんど相関がなかった。

Ⅶ. 考察

A. 対象者の特性

本調査の結果では、妻の職業と対象者の職業（KW検定, $p > .05$ ）、祖父母との同居の有無（U検定, $p > .05$ ）、対象者の帰宅時間が決まっている（カイ二乗検定, $p > .05$ ）ことなどの対象者の

属性による育児行動の回答の差はみられなかった。育児をする時間があるか否かや自分以外に育児を支援する人がいるか否かなどは、対象者の育児行動に影響する重要な要因だと考えられるが、これらの結果は以上の要因が対象者の育児行動に影響を与えないことを示している。

一方この調査では、外出時の付き添いと買い物の育児行動の項目において、子どもの数による回答の差がみられた（Kruskal-Wallis検定, $p < .05$ ）。子どもの数が1人の人ほど外出時の付き添いや買い物をしており、対象者は、子どもが生まれて三か月しか経っていない、すなわち、育児が始まったばかりでまだ育児に慣れない妻と協力して育児をしていると考えられる。また、買い物については、子どもの数が3人の人も、有意に多く買い物をすると回答した。これは、子どもが2人の場合は、1人をおんぶしたり買い物カートに乗せ、残る1人を母親が手で引くことができるが、子ども3人を同伴しての買い物では、子どもの様子をみたり買い物の荷物を持つ人手が必要になるためだと考えられる。以上より、対象者は子どもの数に応じて妻の負担を配慮し、妻を補助するための育児行動を行っていると考えられる。

B. 育児に関する学習

この調査の結果から新たに明らかになったのは、生後3カ月児をもつ父親では、実父が育児をしていた人や実父の子育ての話を聞いたことがある人は、実父と同じような家事行動をしているということであった。辰野(1973)によれば、掃除や食事の後かたづけなどの育児行動は、内容が簡単でかつ視覚的に特徴を記憶しやすく、日常生活に密着しており、日常生活のなかで繰り返し行われる学習だと考えられる。つまり、対象者は実父がこれらの家事行動をするのをモデルに家事行動をしているのではないだろうか。そして、対象者はこのような育児行動を行うことで、生後3カ月というまだ育児負担が大きい時期にある妻を援助しようとしていると推察する。また、過去に育児の経験がある人は食事の後かたづけや洗濯などをしており、過去の育児経験は対象者の育児行動に対する抵抗感や嫌悪感を和らげて、育児行動に取り組み易くしていると考えられる。

C. 育児に関連した態度

本調査から、生後3カ月児をもつ父親は、育児の共同化意識がある人、妻への配慮の気持ちがある人、そして子ども好きな人ほど育児行動をしていることが明らかになった。もともと子どもが好き、妻を愛しているという気持ちは、岡部(1985)によれば育児行動に向かわせる顕在的な行動傾向、つまり、態度である。この育児に関連した態度が、対象者を育児行動へ向かわせ、対象者の育児行動に影響を与えていると推測する。また、育児は共同作業だと思う人ほど子どもを抱いたりあやしており、育児の共同化意識は子どもと直接接触する育児行動と関係があると思われる。

一方、子どもが嫌いな人や子どもの世話を面倒くさいと感じている人は、育児行動をしていなかった。これは、生後3カ月という時期には、子どもの首の座りが完全ではなく世話をする際に危うさがあるため、もともと子どもや育児行動に否定的な人は、子どもの世話を免れたい避けたいといった回避的感情から育児行動をしていないと考えられる。

D. 育児に関する学習、育児に関連した態度、そして育児行動の相互関係(図1)

図1には、この研究から明らかになった、生後3カ月児をもつ父親の育児に関する学習(実父の子育て、直接経験、育児情報)、育児に関連した態度(子どもへの感情、妻への配慮、育児の共同化意識)、そして対象者の育児行動との相互の関係が表されている。

実父の子育ての見聞きの経験、対象者の育児の経験、育児に関する情報を得ること、妻と子への感情、そして育児を共同で行うという意識などは、対象者の育児行動に影響を与えているといえよう($\tau = .211 \sim \tau = .485, p < .05$)。

また、育児に関する学習の項目(実父の子育て、直接経験、育児情報)と育児に関連した態度の項目(育児の共同化意識、妻への配慮)には弱い相関があった($\tau = .202 \sim \tau = .283, p < .05$)。実父の子育てを見聞きすることや育児の直接経験は、対象者にとって印象に残る経験であり、それらの経験が対象者の子ども好きに影響を与えていると推測される。

以上より、生後3カ月児をもつ父親の育児行動、育児に関する学習(実父の子育て、直接経験、育児情報)、そして育児に関連した態度(子ども好き、妻への配慮、育児の共同化意識)は相互に関係があった。だがその一方で、育児に関する学習と育児に関連した態度、育児に関する学習と対象者の育児行動には弱い正の相関しか認められなかった。

したがって、看護職が父親に対して育児に関する看護を提供する場合には、父親への働きかけの視点として、妻への配慮の気持ちと育児の共同化意識をもち、かつ、父親が、出生後の子どもや育児行動そのものに対して肯定的な感情を抱けるように工夫した学習方法でアプローチする必要がある。

VIII. 研究の限界

この研究から、3カ月児をもつ父親の育児行動、育児に関する学習(実父の子育て、直接経験)、そして育児に関連した態度(育児の共同化意識、妻への配慮、子ども好き)との相互の関係が明らかになった。だが、本研究の対象者は生後3カ月

の児をもつ父親であり、生後3カ月以降の子どもをもつ父親の育児行動に言及することは難しい。

IX. 結論

①子どもの数が増えると対象者の育児行動は少なくなる。しかし、対象者の職業や最終学歴、妻の職業の有無や祖父母との同居の有無、対象者の帰宅時間や休日の有無による差はみられなかった。

②育児に関する学習の項目（実父の子育て、直接経験、育児情報）は、育児に関連した態度の項目（育児の共同化意識、妻への配慮）と弱い関係があった。

③育児に関連した態度の項目（育児の共同化意識、妻への配慮）と対象者の育児行動の項目には、やや強い関係がみられた。

④育児に関する学習の項目（実父の子育て、直接経験、育児情報）と対象者の育児行動の項目には、弱い関係があった。

⑤対象者は、実父がしていた家事行動を学習し、同じような家事行動をしていた。また、実父との直接経験が対象者の子ども好きの感情に影響を与えると推測された。

謝辞

本研究は、日本赤十字看護大学に提出した1999年度修士（看護学）論文の一部を修正したものである。研究に際しまして、調査の対象者へ関わる事務など、多大な便宜を図っていただきました。A県B町高齢者福祉課職員ならびに保健師の皆様には厚く御礼申し上げます。また、立川満里元保健係長には、貴重なご示唆をいただきありがとうございました。深く感謝申し上げます。

文献

秋山輔美・板倉美子・江口桂子・岡本恵美・鎌田奈津・近藤三枝・下窪美香・緒方美智子・二宮恒夫（1997）. 父親の育児に関する学習と効果. 助産婦雑誌, 51（11）, 82-87.
Bandura, A.（1977）. Social learning theory. New Jersey: Prentice-Hall.
藤原武弘・黒川正流・秋月都士（1983）. 日本語版 Love-Liking 尺度の検討. 広島大学科学部紀

要Ⅲ, 7, 265-273.

藤原千恵子・日隈ふみ子・吉田絹子（1994）. 父親の養育態度の形成に関する研究. 藍野学院紀要, 7, 17-26.
藤原千恵子・日隈ふみ子・石井京子・上田芳美（1996）. 乳児をもつ父親の養育態度の形成に関する研究. 小児看護, 19（13）, 1774-1781.
藤川信子・千葉陽子・我部山キヨ子（1994）. 父親の対児感情と父性行動の関連. 京都大学医療技術短期大学部紀要, 14, 17-26.
藤田峯子（1993）. 生後2～3ヶ月児を持つ父親の育児参加の実態調査. 母性衛生, 34（1）, 5-13.
柏木恵子編（1994）. 父親の発達心理学父性の現在とその周辺. 川島書店.
厚生省監修（2002）. 厚生白書（平成14年版）. ぎょうせい.
前田ひとみ（1988）. 6～9ヶ月児をもつ父親の養育態度とそれに関わる要因の検討. 国立公衆衛生院昭和63年度特別演習収録, 292-303.
宮田裕美（1987）. 乳児をもつ母親及び父親の親意識・行動に関する検討－3ヶ月児の親を対象として－. 国立公衆衛生院昭和62年度特別演習収録, 155-165.
岡部慶三・竹内都郎・鮑戸弘共編（1985）. 社会心理学. 新曜社.
岡本絹子・中村裕美子・山口三重子・奥山則子・標美奈子・渡部月子（2002）. 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究. 小児保健研究, 61（5）, 692-700.
小野寺敦子（1990）. 父性意識の形成過程について. 聖母女子短期大学紀要, 3, 48-55.
高田紀子（1996）. 父親の子供の世話に対する意識調査－特にその母親への影響を考える－. 国立公衆衛生院特別演習集録専攻課程看護コース, 321-331.
高橋種昭・高野陽・小宮山要・新道幸恵・大日向雅美（1987）. 父母の養育態度の形成とその評価に関する研究. 昭和61年度厚生省心身障害研究「家庭保健と小児の成長発達に関する研究」, 138-146.
高橋種昭・高野陽・小宮山要・新道幸恵・大日向雅美（1989）. 父母の養育態度の形成とその評

価に関する研究. 昭和63年度厚生省心身障害
研究「家庭保健と小児の成長発達に関する総
合的研究」, 248-265.

辰野千壽 (1973). 学習心理学総説. 金子書房.

Tones, K. & Tilford, S. (1994). Health

education – Effectiveness, efficiency and
equity –, (2nd). London: Chapman&Hall.

氏家達夫 (2001). 親になるプロセスと親であるこ
とへの習熟化. 助産婦雑誌, 55 (9), 23-27.